

# 幻想空間

風参

高崎芽衣は心も体も干からびていた。

一人暮らし九年目現在彼氏なし。仕事はそこそこやっていたが居心地が最悪だった。セクハラ・モラハラがまかり通る。そんな職場に最近辞表を叩きつけてきた。

その反動なのか今はダラダラとやっている。外に出なければスッピン、ジャージ姿はいつものこと。

このままでは女として終わりそうだと自分でも思った。だから、たまに外に出る時は少しでもちゃんと出かけることにしている。

かつて働いていた時のように。

この日はチェックのシャツとジーンズに着替え、軽く化粧をして部屋を出た。何か久しぶりに空を見た気がする。

さらに階段を下りて1階に下りた。何か久しぶりに歩いた気がする。

今日の行き先は食料の買出し。ちゃんとマイバックも持っている。料理は好きだがなぜか男の胃袋はつかめないでいた。

少し歩いていくとグレーで統一された一軒家が見えてきた。

なんてこと無い家なのだろうが、地味な街並みの中でどこか映えていた。その家の玄関で一人の男性が掃除をしている。三十代前半だろうか。軽くパーマをかけワイシャツにネクタイ姿は仕事ができる雰囲気醸し出している。

そんな男性が玄関の掃除をしているのだ。

芽衣はなぜか立ち止まって見入ってしまった。思えばこの男性とは会えば挨拶ぐらいはしたことがあったが、そのたびにいつも笑顔を見せてくれる。その笑顔がかつて同じ会社にいた同僚にも似ており、それだけで救われる気がした。

「あ」

芽衣の視線に気付いたのだろうか。男性がこちらを見た。芽衣は慌てて会釈する。

「ああ、こんにちは」

相変わらずの優しい笑顔を向けてくる。

「今、よろしいですか」

いつもとは違う。話しかけられた。一瞬心臓の鼓動があがる。

「失礼ですが、今は仕事をされていませんか」

確かに失礼な質問だ。

「ええ、まあ」

「ちょうどよかった。今人手が足りなくて困ってたんです。よかったら手伝ってください。もちろん給料はお支払いします」

この家にはこの男性以外住んでいる気配はない。若干の拒絶を感じるが、それでも目の前の男性に促され意を決して入ることにした。